

イジワルな吐息

十月のある日、私は秋の色が濃くなった公園に来ていた。

仕事も休みだし、天気もいいし、散歩するには絶好のタイミングだと思ったのだ。頬を撫でるひんやりした風が心地よく嬉しい。

近くの出店で買ったソフトクリームをバクリと口に運び、その冷たさにキュッと目を閉じる。

(ん〜…寒い時に食べるアイスって何とも言えず美味しい)

体はぶるつと震えたけれど、口の中に広がる甘さに頬がとろけそうだ。とても贅沢な瞬間だな、なんてのんびり考える。

近くでは数匹のトンボが飛び回っている。その風景にも、季節が感じられて地味に嬉しい。

(秋だなあ…こういう休日の過ごし方は嫌いじゃないんだよね)

私は青空を見上げ、広がった鱗雲を眺めた。

以前ここに来たのは五年も前だ。その時付き合っていた彼とはすぐに別れてしまって…以来、浮いた話はない。

私、笠井陽菜は今年で二十七歳になったアラサー女子。高校時代からアルバイトしていた喫茶店

『珈琲ポット』で今も店員として働き、一人暮らしをしている。小さな店なので正社員にはなれず、いまだアルバイトの身だけれど後悔はない。

就職活動をして、企業に勤めるという選択肢もあった。それでも私はこの店で働きたかったから、店員の仕事を続けている。お客様に美味しいコーヒーを提供することにやりがいを感じるし、店内に飾られたアンティークの調度品や雑貨の手入れをするのも好きだ。

マスターとは、いずれお店の雰囲気に入った雑貨屋を併設できたらいいね……なんて夢を語ることもある。喫茶店経営は楽なものじゃなく、実際は売り上げをきちんと維持するだけでも大変だと分かっているんだけど。

そんな私には、結婚願望も結構あって……素敵な出会いを求める日々だ。でも、結婚を意識するような彼はなかなかできないままこの年齢になってしまった。

積極的に動かないのが悪いのかもしれないけど……そこまでしたいほど好きだと思える人がいないのだから仕方ない。

先日も合コンに参加したものの、楽しく飲んで楽しく会話して、それで終了。友人達は男の子とメアドを交換していたようだけど、私は気持ちよく酔っぱらっただけだ。

メンバーの男の子から「アパートまで送る」と言われたのも断ってタクシーで帰った。

送ってもらったら、部屋に上げてお茶を出さなければいけないし、と変な義務感を抱いてしまったせいだ。後日それを友達に言ったら、「陽菜は真面目すぎる」と笑われてしまった。でも、皆そんな気軽に男性に送ってもらっているの？ と逆に不思議だった。

(うーん……やっぱり私に合コンは向かないのか……)

こんな私でも、相手を好きだと思ったら積極的に動く。

だから、今は単に運命の出会いがないだけ……だと思う。

とはいえ、恋ってどういう感じだったかもよく思い出せない。手を繋いだり、キスしたり……経験がないわけじゃないのに、私の心と体はすっかり錆びてしまっている。

『陽菜は元気なのが取り柄だ。笑っていれば必ずいい人が現れる』

そう言っただけで励ましてくれたのは、私を育て、高校まで進学させてくれた祖父だ。唯一の肉親で、私の性格や考え方に深く影響を及ぼしているのは、間違いなくこの人だろう。

小学一年生の時に交通事故で両親を亡くして以来、祖父が親代わりになってくれた。その数年前、祖父もパートナーである祖母を亡くしていた。当時の心痛は相当なものだったと思う。

(おじいちゃん、元気かなあ)

祖父は現在、生まれ故郷の九州にある高齢者向け施設で暮らしている。

ここ数週間、祖父の携帯電話に連絡しても、挨拶程度の会話だけですぐ切られてしまう。何か問題を抱えているんじゃないかと心配したけど、この間は、施設で出会った恋人の自慢話を嬉しそうにしてくれたから、そちらに夢中なのかもしれない。

その時の通話の内容を思い出す。

『陽菜はどうなんだい、彼氏はできたのか？』

「ううん、まだいなご」

『陽菜はいい子なのにな……もつと積極的に自分をアピールしないと。私の彼女のように』
「うっ……」

のろけ話にとどまらず恋のアドバイスまでされてしまい、彼氏が欲しいという気持ちが膨らんだ。それに私としては、今年八十歳を迎えた祖父のためにも、早く花嫁姿を見せたいと思っている。

(おじいちゃん、次は私が彼氏自慢する番だからね！)

決意を新たにしたところでソフトクリームに目をやると、それは溶けて傾き始めていた。

「あわわ！」

慌てて食べようとしたその時、後ろで子ども達の歓声が聞こえた。

(何だろう?)

思わず声のする方を振り向いた瞬間、誰かが私の体にぶつかった。

「うわっ」

ソフトクリームが鼻の先に当たり、そのまま床にポトリと落ちる。

「ああ……」

「あ、ごめん」

あまりにそっけない謝罪の言葉が聞こえ、腹が立つ。

(ごめんじゃないよ、アイス落ちたよ！)

キツと目線を上げると、目の前の男性が私の鼻についたクリームをスッと指で拭った。彼の袖口から上品なコロンの香りがフワッと流れてきて、鼻腔をくすぐる。

「っ……」

突然鼻に触れたことに驚き、私は目を見開いた。

怒りはどこかに引っ込んでしまい、緊張しつつスーツ姿の男性を見つめる。ただ、逆光のせいで顔はよく分からない。

「本当にごめん、このハンカチ買ったばかりだから……使って」

低い声が降ってきて、グレーのハンカチが私の方へ差し出された。

その手は、男らしい骨格だけれど……白くてすごく滑らかだ。

(綺麗な手……)

思わず見とれていると、男性がもう片方の手で私の手をグイッと掴んだ。

「っ!？」

「時間ないんだ、受け取って」

「あ、あのっ」

慌てる私の手に、彼はハンカチを握らせる。柔らかくて温かな彼の手の感触に、動揺を隠せない。

「私、ハンカチは持ってますから……」

返そうとする私を見下ろし、その人は地面に落ちてしまったソフトクリームに目をやった。

「ソフトクリームを弁償した方がよかったです？」

「い、いえ。そういうことじゃなくて……」

ハンカチを受け取るのは申し訳ないと言おうとしたところで、彼の胸元から電子音が響く。電話

がかかってきたようだ。

「あ、ごめん。もう行かないと」

彼は胸ポケットからスマホを取り出し、私と会話していた時よりワントーン低い声で電話に出る。「すまない、会議には少し遅れそうだ……ああ、そっちは大丈夫だ」

男性は私の存在など忘れたように、そのまま別方向に向かって歩いていった。

「忙しそうだなあ……」

私は去っていく彼の後ろ姿を見ながら、結局返せなかったハンカチを手に呟いた。

相手は長身で、二十代半ばのサラリーマンといった雰囲気。でも、緊張していて顔はあまり見られなかったからよく分からない。

あんなにせわしない生き方をしていたら、今日の秋らしい風景もきつと目に入らないんだろうな……なんて余計なことを思う。

(まあ、人それぞれの生き方があるから……いいんだけどね)

私はハンカチで手を拭い、落ちてしまったソフトクリームについては、お店の人に謝って片付けもらった。

少ししか食べられなかったから若干の未練はあったものの、もう一度買おうとまでは思えず、次はホットコーヒーを頼んでそれをすすった。

(それにしてもあの人の手、素敵だったな……)

偶然ぶつかったサラリーマンらしき男性の手が美しかったということが、この日一番の収穫

だった。

というのも、私は小さい頃から結構な手フェチなのだ。男性に対しては、顔よりも先に手に注目してしまうくらい。まず、男らしく骨ばっている手が一番いい。肌が滑らかだとさらに魅力的。指が長くて、爪もオーバル型だったら最高だ。

(彼はすごく理想的な手をしていたから、ラッキーな出来事だったかも……なんてね)

私はコーヒーを飲み終わると、ハンカチをポケットにしまい、そのままアパートへ戻った。

公園での一件から数日後。その日は朝から天気が悪かった。

アンニュイな気持ちになりつつ、ベッドから下りて出勤の準備を始める。

顔を洗ってリビングに戻ると、飼い猫のモカがしきりに自分の体を舐めているのが目に入った。

湿度で毛がしっとりしているのが気になるのだろうか。

「モカ、毎日毛づくろい大変だね」

「ミアァ」

私の言葉に一応反応はしてくれるけど、毛づくろいに必死だ。その様子に思わずクスツとなる。

「今日はなるべく早く帰るね」

モカを軽く撫でてから手早く朝食を作り、食べ終えた後に身支度を整えた。

最後にスマホの充電を確かめて、イヤホンを差し込む。

(あ、そういえばこの前ダウンロードした、雨の日に聞くオムニバスアルバムを聴こう)

晴れた日に聴いてもいいまいちムードが出ないと思って、寝かせておいたのだ。イヤホンを耳にはめ、お店へ向かった。

曲を聴きながら雨粒が水たまりに撥ねるのを見ていると、その光景が美しい一枚の写真のように見えてきて楽しい。

雨に対して「あーあ、服が濡れちゃう」なんて思うより、こうして少しでも楽しい気持ちになれるよう工夫した方が得かな、なんて思っている。

こうして、今日も無事アルバイト先に到着。

「マスター、おはようございまーす」

厨房にいるマスターに声をかける。彼はいつも通りマイペースに料理の下ごしらえをしていた。

マスターは祖父の古い友達でもあり、私のことも娘のように扱ってくれる。私も、マスターとこのお店の両方をとても愛しているのだ。

「ひーちゃん、おはよう。雨の中ご苦労さん。今日はお客さん少ないかもしれないなあ」

「そうですねえ……こんな日に来てくれるお客さんは、きつと相当なコーヒー好きですね!」

「あはは。それ以外に、ひーちゃんの顔を見たくて来る客もいると思うよ」

マスターは明るく笑い、仕込み途中のシチューをかき混ぜた。

「そんな人……いたらいいんですけどね」

私は小さく呟き、着替えをするためスタッフルームに入る。

朝聴きながら来た曲を頭の中でリピートしながらエプロンを着けた。鏡に映る自分を見て軽く気合を入れる。

「よしっ、今日も頑張るぞ!」

店内へ戻り、カップを揃えたり磨いたりして、いつも通り仕事をこなしていった。お客様はまだ来ておらず、店内には静かにジャズが流れている。

この日も、平和に過ぎていくように思えた——のだけど……

午後、ちょっと困ったことが判明した。

「ええっ!？」

お昼からシフトに入っている、学生アルバイトの箕輪ちゃん。彼女から聞いた話のせいで、私は思わず声を上げてしまった。

何組かいたお客さんが厨房にいる私達に注目したので、慌てて「失礼しました」と声をかける。

箕輪ちゃんは、両手をくっつけて拝むような仕草を言った。

「ご、ごめんなさい。あの人あんまりしつこくて……」

「だからって、私のことを彼氏募集中だって伝えちゃうなんて……」

「諦めてもらうにはもう、ターゲットを変えてもらうしかないと思っただですよ」

「ひどー!」

「だからごめんなさいって今、謝ってるじゃないですかあ〜」

「もう……」

箕輪ちゃんの言い分に呆れつつ、私は一ヶ月前の出来事を思い出していた。

彼女が言う「あの人」とは、元々この店の常連客だった男性のこと。何度か通ううちに箕輪ちゃんを気に入ったみたいで、二度ほどデートしたのだけど、結局彼女は彼を振った。それが一ヶ月前のこと。しかし彼は諦めてくれず、プチストーカー化してしまったというわけだ。

箕輪ちゃんから相談を受けていた私は、彼女の代わりにバシッとお断りしてあげた。それ以来、彼が店に来ることはなかったが、電話やメールが何度もあったらしい。それで、つい私の名前を出してしまっただと……

「でもまさか、箕輪ちゃんに振られたからすぐ私、ってこともないでしょ？」

「笠井さんには彼氏がいないって言ったら、結構乗り気でしたよ？」

「嘘でしょ……」

確かに、彼氏が欲しいとは思いうけれど、だからといって、誰でもいいわけじゃないのに。

(まあ、私は別にモテるタイプじゃないし、相手も簡単に迫ってくるとは限らないよね)

気持ちを切り替え、ドアを見る。

秋雨は強まる一方だ。路地の奥まったところに建つこの店は、雨の日は極端に客足が鈍る。そのおかげで、厨房で仕込みをしながらの雑談がしやすくなるのだけだ。

おしゃべり相手の箕輪ちゃんが時計を見上げて、目を大きくした。

「あ、もう二時だ！」

「うん、箕輪ちゃんは上がりだね。お疲れ様」

彼女は、土日と平日の昼だけの短時間シフト。一方の私はというと、週一回の休み以外、毎日開店から閉店まで勤務するというフルシフトだ。

「笠井さん、じゃあそういうことで、よろしくです！」

「何がそういうことで、よ……」

「ふふ、ではお先です！」

彼女はマスターにも挨拶をしてから、意気揚々と帰っていく。そう——すでにちゃっかり新しい彼氏を作っている彼女は、これから一緒に食事するのだとのろけていた。

「箕輪ちゃん、幸せそうだったなあ」

レジ裏にある丸椅子に腰かけると、自然に小さなため息が出た。

今の状況が不幸せだなんて全く思っていないけれど、充実した箕輪ちゃんの顔を見ると、やっぱり彼氏がいた方がいいなって思う。

(恋……どこかに転がってないかなあ……)

そんなことをぼんやり考えていたら、カランとドアの開く音がした。私は慌てて立ち上がり姿勢を直す。

「いらっしやいませ！」

入ってきたのは、最近常連になってくれたお客様。彼は私を見て軽く会釈すると、今日も奥のソファ席に座った。そこが彼の定位置のようになっているのだ。

(こんな雨の日も来てくれるなんて……近くにお勤めの人なのかな?)

おしぼりと水を準備しつつ、チラチラと彼を盗み見る。

仕立てのいいスーツ、趣味のいいネクタイに高そうな時計。さらには整った顔立ちで、眼鏡をかけている。普段なら、店内にいる女性客の視線が一気に集まっていたらどう。

「いらっしやいませ」

テーブルにそつとグラスを置くと、彼は濡れた肩をハンカチで軽く拭きながら私を見た。そして静かに口を開く。

「いつものお願ひします」

「あ、はい。マンデリンですね」

注文を終えると、彼はハンカチをテーブルに置き、カバンから単行本を取り出して開いた。タイトルは英語で書かれていて、よく分からない。

(……何の仕事をしてる人なんだろう?)

若い男性がこの店の常連になるというのは珍しく、つい観察してしまう。

「マスター、マンデリンお願ひします」

「はいよ。ひーちゃんの思い人が来たね」

厨房ちゆうぼうに戻って注文を告げたら、マスターが意味ありげに私の方を見てニヤリと笑う。

「べ、別に思い人ってわけじゃ……」

「またまた。彼女に立候補したらどうだい？」

「ちよ……マスター！」

(からかわれちゃった……)

手フェチの私だけど、異性に関してそれ以外の理想や条件は特にない。強いて言うなら、動物好きで子どもやお年寄りに優しい人がいいな、というくらいだ。

そこまでわがままな条件とは思われないだけど……何故か彼氏はできない。

(何が問題なんだろう?)

ふと悩んでしまった私の前に、湯気の立つコーヒーが置かれた。

「はい、マンデリン。おまけでクッキーつけといたよ」

ニツと笑みを見せたことで、マスター自慢の口髭くちひげが揺れる。

「はい。ありがとうございます」

(クッキー作りは私も少し手伝ったんだけど、喜んでくれるかな?)

淹いれたてのマンデリンを運ぶと、彼はクッキーに目をやった。

「コーヒーしか頼んでないはずだけど」

「あ、マスターからのサービスです。よろしければお召し上がりください」

「そう……どうも」

無愛想にそれだけ言い、彼はマンデリンの入ったカップを持ち上げた。その手に、つい目が釘付けになる。ゴツゴツしながらも、しなやかで長い指を持つ彼の手は、すごく魅力的。

(やっぱり素敵な手)

ほうつとため息をつくくと、コーヒーを口にしかけた彼が動きを止めた。

「……何か？」

「はっ……い、いえ！ 失礼しました!!」

慌ててお辞儀をして、その場からギクシヤクと立ち去る。

(へ、変な人だと思われたかな)

冷や汗が出た。だけど、今日もあの素敵な手を見ることができて幸せだ。

彼の手は、色白で美しいのに骨つぽくて男らしくて、爪の形も思わずネイルしたくなるようなオーバル型。あの手を一日好きにしたいと言われたら、朝から晩まで握っていたいくらい。

彼が恋人なら、デートで手を繋ぐだけでものすごく幸せになれるだろう。

そこまで考えてハツとする。

(もしかして……彼氏ができないのは、この手フェチのせい?)

私は無意識のうちに男性を手だけでえり好みしていたのかもしれない。

読書中の彼をチラリと見る。単行本を持つ手は、本当に理想的で……あの手を握れたら、と考えるだけでドキドキしてしまう。

しかも彼はモデルみたいに背が高く、魅力的な低音ボイスの持ち主。少し無愛想だけどイケメンだし……女性にモテないわけがない。

(もう彼女がいるという可能性の方が高いよね)

勝手に考えを巡らせていると、彼がスマホを手にしち上がった。どうやら呼び出しがかかったよ

うだ。本を片付けつつ話していて、通話を終えてからレジに近付いてきた。

「ごちそう様」

私は差し出された千円札を受け取り、レジを打つ。

「マンデリンは六百八十円ですので、お釣りは……」

ふと、彼の大きな手が視界に入り、思わず動きが止まる。

「……何ですか？」

「あ、いえ！ お釣り、三百二十円になります」

急いで小銭を渡すと、私の指がわずかに彼の手に触れた。とたんに、体に変な感覚が走る。

「ふあっ！」

私は声を上げてお金から手を離してしまい、小銭は音を立てて床に散らばっていった。

(い、色々妄想したせいで、過剰反応してしまった!)

「す、すみません！ すぐ別のお釣りを用意いたしますね」

慌ててレジの小銭をもう一度出そうとした手を、男性は素早く止める。驚いて顔を上げると、眼鏡の奥にある瞳が光ったような気がした。

「釣りはいらさない、時間がない。というか……君、この前公園にいた人だよね」

「え？」

男性は私の顔を確認するようにジッと見つめている。

「ソフトクリーム、申し訳ないことをした」

「あ……あの時の！」

(数日前に公園でぶつかった人だったなんて！)

「あ、あの……ハンカチ、洗って家に置いてあるんですけど……」

「いいよ、あれは君にあげるって言ったでしょ」

□元にかすかな笑みを浮かべながら、彼は店を出ていった。

(お客様だったとは、気が付かなかった。でも、あの日はほとんど顔を見られなかったし……)

私はドアを見つめ、渡し損ねた釣り銭をギョツと握りしめる。少し会話しただけなのに、手の中にはぐっしより汗をかいていた。

閉店の片付けまで手伝ってから、アパートに戻った。お店でまかないを食べてきたから、あとはお風呂に入って寝るだけだ。

「ミアー」

玄関を開けると同時に、モカが絡み付いてきた。フワフワの毛がくるぶしに触れてくすぐつたい。「ただいま、モカ。ご飯食べた？」

「ミアー」

私の顔を見上げ、不満げな声を上げるモカ。ドライフードだけでは足りないみたいだ。

「仕方ないなあ。猫缶は特別な時しかあげたくないんだけど」

(今日はちよっと奮発してあげちゃおっかな)

マグロの猫缶を開けて皿に中身を載せ、モカの前に置く。すると、待つてましたとばかりにフガフガ言いながらかぶり付いた。

「はは、美味い？」

私は皿に顔を埋めているモカを横目に、冷蔵庫からスパークリングワインを取り出す。お酒は弱い方なんだけど、これは甘いジュースのようだから好きで時々飲んでいる。

お気に入りのグラスに注ぎ、一気に飲み干した。口の中で炭酸がシュワシュワと弾け、冷たさが喉を通っていく。

「ふはあ」

ワインを飲んだおかげで気持ちが一気に解放される。私は心の中でモヤッと感じていたものを思い切り大きな声で吐き出した。

「一人でソフトクリーム食べたのを見られたー！ー」

馬鹿にされたわけではないのだけど、何となく、あの男性に公園で一人でいたところを見られたのを恥ずかしいと思ってしまった。

(いや、別に見られたっていいじゃない……何で格好つける必要があるの)

考えても仕方のないことで頭の中がいつぱいになってしまう。

(もしかして私、あのお客さんのことを「いいな」って思ってたのかな)

自分の反応や気持ちを振り返ってみると……どうも、そういう部分が否定できない。マスターにからかわれて、変に意識してしまっただけかもしれないけど。

(別にそれ以上ではないし……ね)

ドサリとソファに座り、もう一杯、ワインを注いで飲む。いつもより気持ちよくアルコールが体に回っていく感じがした。

ほどよく酔いが訪れた頃、突然スマホに着信があった。相手の名前は表示されていない。

「誰だろ……?」

知らない人からの電話は取らないようにしているので、鳴り続けるスマホをそのまま放置した。すると、しばらくして画面に「メッセージ録音中」と表示された。どうやら相手は何か伝言を残したようだ。

(誰か知り合いが番号を変えたとかかな)

気は進まないながらも緊急の用事だったらいけないと思い、再生のボタンを押す。聞こえたのは若い男性の声だった。

『もしもし、箕輪さんから番号を聞いてかけました。お返事待っ——』

「う、うっわ!」

最後まで聞く前に、私はスマホを絨毯の上に落とす。電話をかけてきたのは、あのプチストーカー男だったのだ。

(ちよっ……箕輪ちゃんつてば、何で私の番号まで教えちゃうのよ!)

さすがに頭に来て、次に会ったらガツンと彼女に怒ってやろうと心に決めた。でも、その前にこの男性への対応をどうしようかと悩む。

(恋人がいないことを知られている以上、すでに相手がいま、つていう言い訳はできないし……) 結構きつく言っても諦めないタイプみたいだから、どうしたものか。

「うう……頭が痛くなってきた……」

急に疲れを感じた私はワインに蓋をし、シャワーを浴びた後、大人しくベッドに潜り込んだ。

次の日も、その次の日も、男は電話をかけてきて留守電にメッセージを残した。箕輪ちゃんにはガツンと文句を言ったけど、のほほんとしていて、あまり反省の色はない。

「電話だけなんだったら、ブロックすればいいじゃないですか」

「あ……それもそうだね」

気持ち悪さと恐怖が勝っていたせいで、そんな簡単なことさえ思い付かなかった。その場ですぐに男の番号を着信拒否にする。

(これでよし。どうせお店まで来る勇氣なんてないだろうから……もう放っておこう)

スマホをポケットにしまい、一件落着。

ところが……その日の仕事帰り、コンビニの袋を下げてアパートに向かっていたら、暗がりの中で誰かが私の前に立ちはだかった。

「えっ?」

驚いて立ち止まると、相手は低い声で何かを呟いている。

「……で……だよ」

「あの……」

「何で……無視すんだよ……」

少しずつ相手の顔が見えてきて——小さく悲鳴を上げた。目の前にいたのは、何度もしつこく電話してきたあの男だったからだ。

「なっ……何でここまで……」

「あんたが帰るところを尾行した」

「……嘘でしょ」

ジリジリとこちらへ迫る気配を感じ、私も後ずさる。

(この人……普通じゃない。話し合うなんて無理だ)

冷や汗が出て、心臓がバクバクと激しく脈打っている。コンビニの袋を持つ手にも力が入った。

「くそっ……俺を馬鹿にしやがって！」

「きゃあ！」

いきなり男がこちらへ突進してきて、焦った私はとっさに袋を投げる。でもそれは外れてしまい、道路にドサリと落ちる音がした。

(も、もう駄目だ……)

頭を抱えて、身構える。

だけど、衝撃は何もやってこない。代わりに、すぐ傍にもう一人、別の誰かの気配を感じた。

淡いコロンの香りが鼻腔^{びつう}をくすぐる。

(この香り……どこかで……)

「な、何だよ、お前は！」

「この女性の恋人」

「……え？」

恐る恐る目を開けると——お店の常連客である男性が私の前に立ち、相手の拳^{こぶし}を受け止めていた。あの美しい手で。

「あ……」

眼鏡はしていないけれど、さすがに今回は彼だと分かった。凛^{りん}とした表情で相手を見据^みえる姿は、さながら映画のヒーローみたいだ。

「嘘つくな！ 彼女に恋人はいないって聞いたぞ」

「今日付き合うことになったから知らなくても仕方ないか」

しらっと嘘を言い切った男性は振り返り、私の肩にその大きな手をかけて自分の方へ引き寄せた。それが演技だと分かっているけど、自分の体が急激に彼と密着することに動揺^{どうぶ}してしまう。特に、手が私に触れているから……！

(ど、どうということ……これって恋人のふりをしろってこと？)

私は男性に肩を抱かれたまま、必死に笑顔を作った。

「そ、そうなんです。私、この人と付き合うことになったので、もう連絡しないでください」

「嘘だろ、俺は騙されねえぞ」

「うっ……」

バレてしまうかも、と私は焦ったけれど、隣の彼には全くそんな様子がない。

「さつき警察を呼んだから、そろそろ来る頃だな……ちょうどいいからもう少し話をしようか」
「ちっ……くそっ……」

とたんに男の表情に焦りの色が浮かび、ぎゅぎゅつと私に対する文句を言いながら暗闇に消えていった。これくらいの脅しで逃げるとは……肝っ玉は相当小さい男だったようだ。でも……

「……た……助かった……ありがとうございます」

やっぱり怖かった。力が抜けてその場にへなへなとくずおれそうになる私の腕を、男性がとっさに掴む。

「何ですぐに警察に連絡しないんだよ。俺が来なかったらどうするつもりだったの？」

「あ、何とか戦おうと思って……」

「馬鹿なの、君」

真顔で言われ、一瞬言葉に詰まる。こんな失礼なこと、ダイレクトに言われたことはない。

「ば……馬鹿って、何？ あなたこそ、何なんですか」

「君を迎えに来た」

「へ？」

今度は意味不明なことを言い出した。いったい何が目的なんだろう。私の中で警戒心がバリバリ

と強くなる。

「む、迎えにつて……意味が分からないんですけど」

その時、小さく車のエンジン音が聞こえた。見ると、男性の後ろに黒塗りの立派な車が停まっている。スーツをビシッと着込んだ長髪の男性が運転席から出てきて、こちらに向かって軽く会釈した。

「あの、あなた……何者ですか？」

常連客の男性はニコリと微笑み、軽く頭を下げた。

「自己紹介が遅くなって失礼。俺は、『二階堂葵』

名刺を差し出され、街灯の下で目をこらして見てみると、そこには『株式会社 FORTUNE 代表取締役社長』とあった。

(若いのに……社長?)

何の仕事をしているのかまでは分からないけれど、まさか社長だったとは驚きを隠せない。そんな人がいったい、私に何の用があるというのか。

まだ警戒心は解いていないものの、名刺をもらったからには自己紹介しないわけにいかない。

「わ……私は、笠井陽菜といます」

「知ってる」

即答され、面倒なやりとりはもう必要ないと言わんばかりの勢いで向こうが話し出す。

「君のおいしい様の件で話があつてね。まずは俺の家に来てもらえるかな」

「おじい様って……祖父が何か？」

一瞬ひやりとし、祖父に何かあったのではと怖くなった。

男性は淡々とした様子で私の手を引いた。

「心配するようなことじゃない。というか、どちらかというと君は喜ぶんじゃないかな」

「え？ どういう……あ、あの」

二階堂さんに腕を取られたまま数メートル歩くと、私はそのまま後部座席に押し込まれた。

「あの、私、アパートに帰らないと。猫に餌を……」

続いて乗り込んだ二階堂さんが怪訝な顔で私を見る。

「猫？ ……部屋のものなら後で全部屋敷に持ってこさせるから心配ない」

「え、全部？ 屋敷？ い、意味が……」

私の驚いている顔がおかしいのか、彼はククツと喉を鳴らした。

「陽菜さん、君は今夜から俺の家で暮らすんだ」

「えっ……ええ!？」

驚く私を乗せ、車は走り出してしまった。

やがて、私達は立派な門構えの一軒家に到着した。運転手を務めていた長髪の男性は速度を落とし、玄関前までゆっくり進んでいく。

これが二階堂さんの家なのか。かなり広い敷地だ。

男性は車を停めて運転席を降りると、後部座席まで来てドアを開けてくれた。

「すみません、ありがとうございます」

車を降りた私は、驚きで思わず「わあ……」と声を漏らした。

目の前にそびえ立つのは、近代的でおしゃれな家だった。ドアが開かれると、さらにすごい光景が広がり、足を踏み入れるのがためらわれた。見たこともないような立派なシャンデリアが私を出迎え、エントランスの真正面には階段が伸びており、映画の世界のようだ。

「深瀬。俺は先に部屋に行ってるから、彼女が少し落ち着いたら連れてきてくれ」

「かしこまりました」

二階堂さんは私を一瞥してから二階へ上がっていった。

「リビングで少しお休みいただきましたら、葵様のお部屋へ案内いたしますので」

長髪の男性が私に会釈した。彼も整った顔立ちだが、二階堂さんとは違い中性的な美しさだ。

「……あ、ええと」

「深瀬と申します。葵様の秘書をしております」

「そ、そうなんですか」

私は深瀬さんに案内されたリビングで休ませてもらった。

でも、五分も経たないうちに深瀬さんが迎えに来て、私を二階堂さんの部屋へ案内すると言った。（まだ全然落ち着いてないだけだな……）

内心そう思ったのが読み取られたのか、深瀬さんが申し訳なさそうな顔をした。

「すみません、葬様はややせつかちなもので」

「そ、そうなんですか。いえ、大丈夫です」

私はソファから立ち上がり、深瀬さんの後ろをついていった。

廊下には絨毯が敷きつめられており、足音は吸収されて全く音がしない。掃除も行き届いて、どこにもホコリや汚れは見当たらなかった。

(……まるでホテルみたい)

やがて、長い廊下を半分ほど歩いた辺りで深瀬さんは足を止めた。

「中で葬様が待つておられます」

深瀬さんがドアを軽くノックすると、「開いてるよ。どうぞ」と声がした。

カチャリとドアを開け、深瀬さんは私が部屋に入るのを待つている。私はドキドキしながら、檻に入れられる小動物のように恐る恐る足を踏み入れた。

「失礼します」

中は余分なもののないスッキリとした空間で、重厚感のある木製の家具でまとめられていた。どれもすごく高そうだ。それだけでも彼が相当なお金持ちだと分かる。

二階堂さんは窓際にあるソファの前に立ち、そこに座るよう手で合図した。

「どうぞ」

「あ、はい」

慌ててソファに腰かけると、彼は無表情のまま私に尋ねてきた。

「コーヒーと紅茶、どっちがいい？」

「あ……コーヒーで」

「了解。深瀬、頼む」

この声が聞こえていたのか、深瀬さんはドアの向こうで「はい」とだけ答えた。これから用意してくれるらしい。

「さてと……まず君をここに連れてきた事情について話さなくちゃならないな」

二階堂さんもソファに座り、私を見据えながら指を組む。

「そ、そうでしたね。祖父に何かあったんですか？」

流されるように連れてこられて、つい忘れてしまっていたけれど、祖父のことで話があると言われていたんだった。

私の祖父は今、生まれ故郷の九州にある、高齢者向け施設にいるはず。一緒に暮らそうと何度も言っているけど、仲間の大勢いる施設の方がいいと言って譲らない。結構充実した老後ライフを送っているみたいなのだ。

その祖父と二階堂さんに……いったい何の関係が？

「俺の祖母と君のおじいさんが、つい三日前に結婚した」

「え……ええっ!？」

(結婚なんて聞いてないし！ おじいちゃん、嘘でしょう!?)

私の驚きぶりを見て、二階堂さんはクスツと笑う。

「何も知らされてなかったのか。まあ、俺も入籍した日に祖母から聞かされて、まだ驚いてる最中だよ」

「……」

それから二階堂さんが事の経緯を詳しく説明してくれた。

二人は施設で知り合い、意気投合。「老後を二人で生きていきたい」と、二階堂さんのおばあ様から三日前にプロポーズした。そのまま即入籍し、今、パリで約二ヶ月に及ぶ新婚旅行中だというのが。家族に言うとは色々面倒なことになるだろうから、全てが落ち着いたら私達に打ち明けるつもりでいたらしい。

「お付き合いしている女性がいるっていうのは聞いてましたけど……け、結婚するとは聞いてなかったです」

（そりゃ、おじいちゃんはおばあちゃんを亡くして以来、ずっと独り身だったから、再婚は全く問題ないんだけど）

私に何も言ってくれなかったのは、少なからずショックだ。

「何せ急な結婚だしね。信じられないなら電話でもして確かめればいい」

「い、いえ……疑ってるわけではない、ですけど」

二階堂さんはフツと息を吐き、背もたれに身を預け、私に一枚の写真を見せてくれた。

「今朝、祖母からこれがメールで送られてきた。陽菜さんが来たら連絡をくれてね」

そこに写っていたのは間違いない祖父だった。お年は召しているけど可愛らしい感じのおばあさ

んと、肩を寄せ合って笑っている。

二人の幸せそうな写真を見せられたら、さすがに納得せざるを得ない。

「祖父の再婚については分かりました……でも」

「二人が結婚したからって、何で君がここに住むことになるのか？」

「は、はい。それです」

（そこ、そこが一番謎……）

「祖母のたつての願いだつたから、かな」

「おばあ様の……？」

「どういう意図で君をここに住ませたいと思ったのか、俺にも全く分からない。ただ、必ず君を呼び寄せるように言われたんだ。あの人が喜ぶことなら……できるだけ叶えてやりたい」

神妙な表情をする二階堂さんの様子から、彼がおばあ様をとて慕したっているのが伝わってくる。

（無愛想だとばかり思っていたけど、案外優しい人なのかも）

緊張していた心が少し、ホッと和なんだ。

「理由はそれだけ。変かな？」

真面目な顔でそう尋ねてくる二階堂さんを見て、私は首を振った。

「いいえ……むしろ素敵だと思います。さっきまでは事情がよく分からなくて、戸惑っていただけです」

私の返答に、彼は目を少し見開いた。

「私も祖父が大好きで……祖父が願うことなら、可能な限り叶えてあげたいって思ってますし」
結婚は先を越されてしまったけど、祖父にウエディングドレス姿を見せたいと思ってる。

「ただ、おばあ様と私は面識がないのどうして……とは思いません」

「俺もそれは分からないんだ。まあ、それくらい君のおじいさんを愛してるってことじゃないかな。
相手の孫娘を放っておけないとか。いかにも祖母が考えそうなことだよ」

「……」

二階堂さんだって、この展開には相当戸惑ったはず。赤の他人と急に同居しろというのだから。
(でも、おばあ様のためにそれを受け入れたんだね……)

思いがけない状況ではあるけれど——目の前に座るクールな男性と過ごすのが嫌じゃないと思っ
ている自分がいた。

「居候いせうこうになりますけど……よろしくお願いします、二階堂さん」

ぺこりと頭を下げると、二階堂さんはおもむろにソファから立ち上がった。

「じゃあ、君の部屋に案内するから、ついてきて」

「あ、はい」

二階堂さんはドアのところまで行くと足を止め、「それから」と言って振り向いた。

「俺を苗字で呼ぶのやめてくれる？ 仕事から解放されてない気分になる」

「でも、じゃあ、何て呼べば……」

「葵でいい」

「わ、分かりました……葵、さん」

ドアを開けると、ちょうど深瀬さんがコーヒを持ってきてくれたところだった。マンデリンか
な……うちの店と同じくらいいい香りがする。

「ああ、とりあえずそこに全部置いといてくれ」

「かしこまりました」

深瀬さんは部屋の真ん中にあるテーブルにトレイごと置き、一礼してから静かに立ち去った。

「君の部屋は二階だ。荷物と猫は明日の朝には届くようにするから」

「は、はい」

(モカ、知らない人が苦手だから、驚くだろうな……ごめんね)

明日再会したら思いきり可愛がってあげよう。

用意してもらった部屋は、私にはもったいないくらい綺麗だった。今まで六畳二間のアパートで
暮らしていたから、その広さにもびつくりする。

「荷物が届くまでに必要なものは、ベッドの上に一式用意してあるから使って」

「あ……はい、ありがとうございます」

「ちなみに俺の寝室は隣だから、間違わないでね」

そう言って意地悪な笑みを見せた葵さんの言葉に、ドキリとする。

「ま、間違いませんよ」

「そう?」

目を細めると、葵さんは突然壁に手をつけて私を見下ろした。彼は私をすっぱり覆おほってしまえるくらい背が高い。驚いて声も出せずにいる私を見ながら、低い声で言った。

「これから、よろしく……陽菜さん」

「あ……はい。よ、よろしく……お願い、します」

「……」

「……」

妙な沈黙が訪れたかと思うと、葵さんはおかしさを堪たえられないようにプツと噴き出した。

「え、な、何ですか?」

「何か期待した?」

「いえ、な、何も」

「キスされるとでも思った?」

「思ってませんよ!!」

ムキになって否定する私を見て、彼はまたプツと噴き出す。

「面白い同居人ができたな」

「お、おも……」

「バスルームはこの階の奥にある。適当に使って」

私はまだ動揺しているというのに、葵さんはスッと真面目な顔に戻り、ドアノブに手をかけた。

「じゃ、おやすみ。ここには妹も一緒に住んでるから、明日改めて紹介するよ」

私の頭をポンと叩くと、葵さんはそのまま部屋を出ていった。

「こ……子ども扱い……」

『何か期待した?』

葵さんのからかうような笑みを思い出して、ドキリとする。涼しげな目元にスツと通った鼻筋。

唇は女性以上に艶つやっぽい。間違いないイケメンの部類に入る人だ。

だからというわけでもないけど、さつき壁ドンされた時、動揺したのは否定できない。

(でも、自分から意味深な行動しておいて笑うなんて……卑怯者!)

私は気持ちを入れ替えるために大きく息を吐き、用意されていたパジャマや洗顔セットなどを手に取った。

(それにしても、ドラマみたいな展開だな……)

その時、スマホの着信音が鳴り、飛び上がりそうなほど驚いた。

「び、びっくりした……こんな時間に、誰だろ?」

ポケットに入っていたそれを取り出すと、今パリにいるという祖父の名前が表示されていた。

「お、おじいちゃん!」

急いで通話ボタンを押す。大好きな祖父の声が耳に飛び込んできた。

『もしもし、陽菜か?』

「おじいちゃん! もう、最近ゆっくり話せなくて気にしてたんだよ?」

『いやあ、連絡が遅くなってすまない。ここ数日、かなり忙しくしてな』

「結婚するならどうして言ってくれなかったの！」

『あ、もう知ってたのか』

「知ってるよ！ ていうか、お相手のお孫さんにも会って、今その人の屋敷にいるんだよ」

『なるほど……美智子さんはやるのが早くて驚くね』

祖父の声がいつも通りのんびりしているから、私の気持ちも次第に落ち着いてくる。

お相手の名前は「美智子さん」といい、祖父と同年。私のことは、珈琲P o t に何度か立ち寄ってくれたことで知ったらしい。

「珈琲P o tを知ってる方なんだ」

『ああ。去年、彼女が仕事を引退して九州へ移ってくる少し前に、店に時々行っていたらしいんだ。当時、引越しや業務の引き継ぎがあっただけでかなり忙しくしていた中で、唯一心が落ち着く憩いの時間だったと言っていたよ』

「そっか……私、その時美智子さんを接客したのかな」

『丁寧な接客と笑顔が印象的ない子だったって、とても気に入ってたみたいなんだ』

自分の接客をそんなふうに感じてくれてる人がいたというのは、素直に嬉しい。

『珈琲P o tと聞いて、私もピンときてね。それは私の孫かもしれないって話をしたら、本当にそうだと分かって彼女は大喜びだよ。ぜひ自分の孫と会わせたい、ってことになったんだ』

「そうだったの」

『彼女の孫……葵くんって言ったね』

「あ、うん」

『写真を見せてもらったが、いい男じゃないか。このまま結婚までうまくいけばいいな、陽菜』

——ん？ それだとまるで、葵さんがすでに彼氏になったみたいじゃないか。

「え、ちょっと待って、何それ？」

『私も美智子さんも、ひ孫の顔を見るまでは元気ではいるつもりだからな。まあ、頑張りなさい』
陽気に笑う声が聞こえ、そのまま祖父は電話を切ってしまった。

「おじいちゃん、意味不明だよ……」

スマホを手に、しばし立ち尽くす。

美智子さんが私を気に入ってくれたのは嬉しいけれど、だからといって葵さんも私を気に入るとは限らないのに。

（あの感じだと、もしかして私と葵さんを近付けるためにこの家と呼んだ……のかな？）

ベッドにポフンと身を投げると、思ったよりスプリングが利いていて体が弾んだ。落ちそうになったスマホを慌てて押さえ、大きくため息をつく。

（おじいちゃん……ひ孫、とか言ってたな）

もしかして、葵さんと私が結婚するところまで想定しちゃっているんだろうか。

「結婚……」

頭だけベッドから上げ、左右に強く振る。

(いやいや、葵さんの態度からして、私をそういう対象として見る様子は全くなかった) 期待しているのは美智子さんと祖父だけだ。だいたい、葵さんにだって選ぶ権利があるし、私だってまだ葵さんが好きっていうわけじゃない。……魅力的な人だとは思っけ。思考はグルグル回って終わりがなく、ベッドの上でグダグダ考えているうちに瞼がどどん重くなつていく。今日は色々ありすぎて、頭の中はほぼ停止状態だ。

(もう……シャワーは……明日でいいや……)

そのまま私は、着替えもせずに眠ってしまった。

次の日。

目を覚ますと六時という時間だった。豪華な部屋に寝ていることに驚いて——すぐに昨夜のことを思い出す。

(あ……私、今日からここで暮らすんだっけ)

のそりと起き上がると、まだ昨日の洋服のままなのに気付いた。汗の匂いがして恥ずかしくなり、シャワーを借りるためにベッドを下りる。

階段から最も遠い突き当たりに、お手洗いとバスルームがある。私の部屋からそこへ行くまでには、葵さんの寝室ともう一部屋を通り過ぎる形だ。

先にお手洗いを済ませ、バスルームに誰もいないのを確認してからそっと足を踏み入れる。浴室は普通の家の数倍はありそうな広さだし、脱衣所も広い。湯船で足を伸ばしてうたた寝できてしま

いそう。

「うわ……入るのに気後れしちゃうなあ」

簡単にシャワーだけ浴び、そそくさと体を拭いて、用意してもらった服に着替える。サイズはピッタリだった。どうやって調べたんだろう……あえて気にしないようにしよう。

ついでと思い、のんきに歯を磨いていると、ドアをノックする音が聞こえた。

「あ、はい！」

「まだかかる？」

声の主は葵さんだ。私は慌てて口をすすぎ、すぐにドアを開けた。

「び、ごめんなさい」

明らかに不機嫌そうな顔をした葵さんを見上げる。

「……」

「あの……ずっとここです？」

寝起きの彼は、頭がボサボサでパジャマも少しよれっとしてしている。ビシッとスーツを着込んだ姿しか見たことのない私は、何というか……ちよっと可愛いと思ってしまった。

「君さ……朝に風呂入るタイプなの？」

「い、いえ。昨日疲れすぎて、そのまま寝てしまったので」

「ふーん……まあいいけど」

言いながら葵さんは髪を軽くかき上げる。光に当たると、藍色に輝いて見えてとても綺麗だ。

次に、葵さんはしゃがんで何かを拾い上げた。見ると……それはなんと、私のブラ。

「これ、君の？」

「やだっ！」

彼の手からそれを奪い取り、洋服の中に紛れさせる。裸を見られたのと同じくらい恥ずかしくて、頭から湯気が出そう。そんな私を見て、葵さんはプツと噴き出した。

「なっ、何で笑うんですか！」

「サイズ合っていないんじゃないの、それ。すき間ができるでしょ」

私の胸付近に視線を落とし、また彼は噴き出す。今度こそ頭に血がのぼった私は、腕を交差して胸を隠しながら叫んでしまった。

「それってセクハラですよ、変態！」

「自分で勝手に落としておいて……こういうのは不可抗力って言うんだよ」

「だ、だからって……サ、サイズのことまで……実際に私の胸を見たわけじゃないくせに！」

「見てもいいの？」

「うっ……あ、いえ……」

勢いとはいえ自分の言葉に自分で恥ずかしくなる。

「兄様、朝早くからどうしたの？」

突如、葵さんの後ろから、目が大きくて可愛らしい顔をした女性が現れた。

「え……」

彼女は艶のある栗色の髪をしていて、瞳は薄いブルー。洋風の顔立ちだ。その可憐さに、思わず怒りを忘れて見とれてしまった。

「花音、この人が話をしていた笠井陽菜さん。そして陽菜さん、これは俺の妹だよ。花音っていつて、二十一歳の大学生」

「これって言い方はひどいわよ、兄様」

プウと頬を膨らませて怒ってみせる仕草もまた可愛らしい。彼女は私の方に視線を戻してニコリと微笑んだ。

「おばあちゃんの再婚相手のお孫さんでしょ？ 初めまして、花音です」

「あ……昨日からこの家でお世話になることになりました、笠井陽菜といいます」

「よろしくね、陽菜さん」

軽く頭を下げると、彼女はそのまま去ってしまった。

（歩き方もそうだけど、花音さんって言葉遣いも丁寧で、お嬢様”って感じだなあ）

「あ。花音さんも、ここを使いたかったんじゃない……」

私がバスルームを占有してしまったことを反省していると、葵さんが私の前を通り過ぎ、歯ブラシを手に取った。

「あいつは一階のバスルームを使うから」

「そ、そうなんですか」

大きな家だとお風呂が二つもあるのかと驚く。

「兄とはいえ、ここで俺と鉢合わせるのが嫌なんだろ」

鏡の前で乱れた髪を整えながら、葵さんは淡々と話す。彼と並んで立っているという光景が、何とも不思議に思えた。

（昨日まで名前も知らない人だったのに、今はパジャマ姿を見ている……）

「……どっちのバスルーム使うべきか悩んでる？」

葵さんは顔をこちらへ向けた。

「あ……」

（そうか、私がおかしいところを使ったら葵さんが入りにくいよね）

ブラを見られたことを考えたら、これから先、裸を見られてしまう可能性もないとは言えない。

それはかなり困る、なんて考えていたら、葵さんが短く言った。

「心配しなくていい、君の裸を見たいとは思わないから」

「なっ！」

断言されると、それはそれで傷付くものがある。確かに胸は大きい方じゃないけど、寄せて上げれば、Cカップくらいにはなるはず！

「それに、一階のバスルームは花音専用みたいになってるし。君はここを使った方がいいと思うよ」

（ここまで言うと葵さんは歯を磨き始め、それっきり会話は途切れた。）

（この感じだと、私の裸を見ても驚いたりしなさそう……）

私は脱いだ服をギュッと抱いてバスルームを出た。

朝のドタバタから数十分後、今度は朝食のメニューに驚いていた。高級ホテルの朝食みたいな豪華さなのだ。

（贅沢すぎて、ちょっとカロリーが高すぎるような……）

たまになら美食もいいけど、毎日これだと多分健康に悪い。それが分かっているかのように、花音さんはサラダ以外に手をつけていない。葵さんに至っては、フォークすら手に取らず、ヨーグルトジュースだけを飲んでいる。

「……」

来て早々食事に文句をつけるわけにもいかず、とりあえず私は用意された朝食を食べた。

スクランブルエッグを口に運んでいると、花音さんが自分の食器を片付けながら言った。

「陽菜さん、うちの朝食はどう？」

「あ、ええ……すごく豪華で驚きました」

「これ、ホテルのシェフが作ったものを冷凍してるの。だからうちの朝ご飯は、レンジでチンするだけ。サラダも冷蔵庫に小分けしてあるのよ」

無邪気にそう言う花音さんの表情を見る限り、二人にとってはこういう朝食が当たり前で、できたてを食べるという習慣はないみたいだ。

「あまり手をつけていらっしやらないですけど……」

「んー……そうね、さすがに何年も同じメニューの繰り返しだと飽きちゃったっていうか。全部食べると太っちゃうし」

それでもご両親が「きちんと朝食を食べるように」とうるさいから、仕方なく形だけこんなふうになってるのだそう。二人のご両親は仕事で忙しく、一年のほとんどを海外で過ごしているらしい。

「……こんなに豪華でなくていいなら、朝食、私が作りましょうか？」

思わずそう尋ねると、二人は驚いた顔をして同時に私を見た。

「作るって……何を？」

葵さんが妙な質問をしてくる。

「だから、朝食です。ご飯とお味噌汁と、あと少しおかずを付けるくらいですけど」

「……」

「あ、和食が嫌なら、洋食にします」

「ううん、和食がいい！ね、兄様もそっちの方が好きでしょ？」

嬉しそうに花音さんがはしゃぐのを見て、葵さんは空になったグラスを置いて頷く。

「やった！ねえ、できたら夕飯もお願いしたいのだけど、いい？」

「あ……ええ、そんなに豪華なものではないですけど」

期待に満ちた花音さんの瞳を見ていると断れず、私は自分が作れるレシピのレパートリーを思い浮かべる。

「嬉しい、ありがとう！じゃあ、明日からシェフのお料理はいらなくて深瀬に言ってくるわね」

椅子にかけてあったスカーフをフワリと首に巻き、花音さんはダイニングルームを出ていった。

すぐに、深瀬さんを呼ぶ彼女の無邪気な声が聞こえる。

「いいんですか、私が食事担当しちゃうって」

恐る恐る葵さんの様子を窺う。彼はテーブルの上を見つめながらフツと笑った。

「家に他人を入れるのが嫌で、この生活を続けてきたんだが……まさかこういう形で食事を作ってくれる人が現れるとは思わなかった」

その言葉を聞き、私は『他人』としては扱われていない感じがして、ホッとした。

朝食後はコーヒーを飲むのが日課らしい。葵さんは壁際の棚まで歩き、ストックされていた数種類の豆の袋のうち、一つを取り出した。

「コーヒーはご自分で淹れてらっしゃるんですか？」

「うん、豆の香りが好きだから」

そう言いながら、葵さんはミルで豆を挽き始める。今日はキリマンジャロを選んだらしい。うちの店でいつもマンデリンしか注文しないのは何か意味があるんだろうか。

(それにしても、すごいカップのコレクション)

同じ棚に並ぶコーヒーカップも圧巻だ。ものすごい種類があり、どれもすごく美しいデザイン。

この家なら、少し改築するだけでカフェが開けてしまいそう。

「カップは私が出しますね。葵さんはどのカップを使ってるんですか？」
「タンタイトの青いやつ」

「あ、私もこのシリーズ好きなんです。上品ですよね」
美しいブルーの花が描かれた高級カップ。タンタイトというのは、洋食器の海外ブランド。私も好きで、自分用に少しずつ買い揃えている。

一番上の段にあるそれを取ろうと背伸びしてみたけど、高すぎてなかなか届かない。
（壊したらいけないし……う、あと少しなのに）

ぎりぎりまで手を伸ばしたところで、フツと背後に人の立つ気配がした。

「え？」

「無理すると足つるよ？」

私の頭の横から葵さんの手が伸びて、いとも簡単にカップを手にした。

「あ……すみません」

彼のつけているコロンのいい香りが鼻腔をくすぐった。同時に、彼の体温もほんのり伝わってきて、その距離の近さに鼓動が速くなる。

「カップは俺が出すから、君はあれをよろしく」

葵さんはミルを指さした。

「わ……分かりました」

私は動揺を悟られたくなくて彼から離れる。ドキドキが治まらないまま葵さんの姿を改めて見る

と、心臓に矢が刺さるような感覚に陥った。

（あ、あれ……この人、こんなに格好よかつたっけ？）

朝から見ていたはずなのに……と、目を瞬た。

ネクタイをきちんと締めたワイシャツ姿の葵さんは、均整の取れた美しい立ち姿をしている。

以前から素敵な人だとは思っていたけれど、それはあくまでも芸能人に憧れるファンみたいな気持ちというか……。でも、この苦しいくらいドキドキ感は何だろう？

変に葵さんを意識しすぎてしまい、落ち着くために椅子に座って呼吸を整える。

「何？」

テーブルにカップとソーサーを並べながら、葵さんが私の方をチラリと見る。

「あ、いえ！ その……コ、コーヒーカップ……随分たくさん集められたんですね」

うわずる声をごまかしながら食器の並ぶ棚に目をやると、葵さんもそれを見つめて優しげな表情を浮かべた。

「ああ……これ、祖母が若い頃からコレクションしてたものなんだ」

「そうなんですか」

（おばあ様のお美智子さんは、葵さんにとって大切な人なんだね……）

ちよつとだけ美智子さんが羨ましくなった。

しばらくして、コーヒー豆のいい香りがダイニングに漂った。

立ち読みサンプル
はここまで

飲むのもいいけど、この香りに包まれているのが何とも幸せだ。

「新鮮な豆が手に入ると、その香りだけで一日幸せな気分になれますよね」

ドリッパーから漂う香りに鼻をフンフンさせていたら、葵さんがクスッと笑った。

（変なことを言ったかな？）

顔を上げると、彼は珍しいものを見るような目で私を見つめていた。

「香りだけで一日幸せだなんて、随分安上がりな人だな」

「い、一日はオーバーだったかもしれないですけど、そんな気分になりますよねってことですよ」

「ふーん……そんなもんかな」

葵さんは気のない感じで呟き、淹れたてのコーヒーをすすった。

私はゆっくりコーヒーを楽しみたかったのだけど、葵さんは時間がないみたいで、コーヒーを半分以上残したまま慌ただしくジャケットを着込んだ。

「行ってくる」

「あ、はい……行つてらっしゃい」

目を鋭く光らせ、社長の顔になった葵さんはリビングを出ていった。

（葵さん……結局、何も食べないで行っちゃった。お仕事集中できるのかな？）

カップの中のコーヒーを見つめながら、ちよつと心配になってしまう。

でも、葵さんはきつと余計なお世話って言うだろうな。

荷物が午前中に届くということを知っていたから、私はマスターに電話して事情を話し、今日だけ出勤の時刻を遅らせて欲しいとお願ひした。すると何故かマスターのテンションが上がる。

『ひーちゃん、とうとう同棲するのかい？』

「ち、違いますよ……これは複雑な事情で」

『いやいや、めでたいね。とにかく今日は休んでいいから、ね？』

マスターは何か勘違いしているみたいで、何度も説明したのだけど、「休んでいい」の一点張りだったのでそれに甘えることにした。

「すみません。ありがとうございます」

（明日もう一度、ちゃんと説明しなくちゃね……）

スマホをポケットに入れ、ホッと息を吐く。

その後、キッチンで朝食の片付けをしていたところに、深瀬さんが音もなく現れた。

「あれ？ 深瀬さん……葵さんと一緒に深瀬さんを見た？」

蛇口を締めて水を止め、何か言いたげな深瀬さんを見た。

「ええ。午前中は陽菜さんの荷物を部屋まで運ぶよう指示されていますので」

「そ、そうなんですか。ありがとうございます」

私はペコリと頭を下げてから、気になっていたことを口にした。

「あの、私の飼っている猫のことなんですけど」

「はい。存じ上げていますが、どうされました？」